心理アセスメントにおける描画法概観（2）

名島　潤慈・津田真裕美*1・船木　智美*1・原田　梨沙*1・津藤　優香*2

A Review of Drawing Methods in Psychological Assessment（2）

NAJIMA Junji, TSUDA Mayumi, FUNAKI Satomi,
HARADA Risa and TSUTOH Yuka
(Received February 10, 2005)

キーワード：心理アセスメント，投映法，描画法

Ⅰ　本稿のねらい

前稿の「心理アセスメントにおける描画法概観（1）」（名島ら，2004）においては描画法のなかの HTP・人物画・家族画・動物画・誘発線法・風景の関係といったものを概観したが、本稿ではバウムテスト・自画像・学校場面・食事場面の関係などについて概観してみたい。

Ⅱ　バウムテストの関係

鉛筆で1本の実のなる木の絵をかいてもらうバウムテスト（Baumtest, tree test）はスイスの Emil Jucker が創案し、同じくスイスの Karl Koch（1906-1958）が大成させたものである（Koch, 1949, 1952）。日本での最初の研究には国吉ら（1962）のものがある（深田<1957, 1959>の樹木画の研究は Buck の HTP のやり方に従ったものである）。それ以後、バウムテストに関する研究は膨大なものとなっている（過去の諸研究については、一谷ら編著，1985；津田，1992；名島ら，1993；名島ら，2001の各引用文献欄を参照されたい）。本節では、できるだけ近年のものに絞って概観したい。なお、バウムテストにおける色彩使用の問題（色彩バウムテスト）は、他の描画法におけるそれと合わせて、別の機会に論じたい。

1．バウムテストの変法

変法としては、①黒色バウム（鉛筆）と色彩バウム（12色）の2枚法の「黒ー色彩バウムテスト」（名島ら，1974; 名島，1996, 1998, 1999, 2004）、②1枚の紙に3本のバウムをかく「3本の樹木画テスト」（Buechele-Karrer, 1974; 宮崎ら，1989）、③桜の木をかいてもらう「Baum-C」と木の模写をしてもらう「Baum-S」（後藤，1975）、④「枠づけバ

*1 山口大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専修
*2 メープルヒル病院

ウム」(森谷, 1983; 森谷ら, 1984)、⑤バウムテストの「2枚実施法」(一谷・津田ら, 1985)、⑥1枚目の紙に「木」、2枚目に「もう1本の木」、3枚目に「夢の木」(美しいと思う木、庭に植えたいと思う木、想像上の木など) をかいてもらう「3本の木」(Castilla, 1994;阿部, 2000)、⑦「木の根っこ」をかいてもらうもの (中園, 1996) がある。このようにバウムテストにはさまざまな変法が考案されているが、それぞれを相互に比較・検討するといった試みはまだなされていない。

2. バウム空間

一谷ら (1987, 1988) は人間の生涯にわたるバウムの使用量 (利用面積) の変化を検討しているが、それによると、用紙全体では、性別を問わず年齢段階によって使用量は変動する。おおむね幼児期から70歳代にかけて逆U字型の使用量となる。使用量のピークは、男性で中学生のとき、女性で30歳代である。人生初期には精神的生動性や自己拡大性は低いが、児童期以降次第にそれらが活発となり、50歳をすぎると次第にそれらは衰退していく。また、一谷ら (1989) によると、バウムの幹の縦中心線からの距離が最も右寄りになるのは働き盛りの30代から50代であり、60代で左寄りに逆戻りする。これは、一般社会からの引退からくる危機によるものである。ちなみに、一谷ら (1986) はKoch (1952) や山下 (1982) の研究よりも年齢層を広げて「樹冠に対する幹の高さの比率」の推移を検討しているが、その結果、幼児から70代にかけて釣り針型 (女性ではV型に近い) に変動することが分かった (幹>樹冠→幹<樹冠→幹≒樹冠)。なお、バウム描画の空間使用量について村田 (2002) は、自己に対する評価感情との関連性において、被検者が否定的に自己を評価していないほどバウム空間は増すが、肯定的な自己評価をどれだけ持っているかということにバウム空間の使用量は影響されないということを見いだした。

3. バウムの幹先端処理の問題

山中 (1976) は、統合失調症 (精神分裂病) と非定型精神病に特徴的な幹先端として「漏斗状幹上開 (funnel-shaped apical opening)」(幹の上方が漏斗状に開いたもの) と、それを基盤に成立する「メビウスの帯現象 (Maebius' stripe phenomenon)」(メビウスの木とも言う) の2つを挙げた。これはかつて藤岡ら (1971) がその存在を指摘した「幹先端開放型」に相当する。ちなみに臺ら (2001) は統合失調症の急性・再発期に頻発する「つつぬけ画」は山中の「メビウスの帯現象」と同じものとしているが、臺らの論文に掲載されている「つつぬけ画」の実例を見ると、必ずしも漏斗状になっていない幹上開や、必ずしもメビウスになっていない幹上開まで含まれている。つまり、臺らの「つつぬけ画」は漏斗状幹上開やメビウスの帯現象よりも広いと言える。

ところで最近岸本 (2002) は、幹の内空間が木の外の空間と隔てられているか否かという観点から、バウムを、①開放型、②閉鎖型、③その他 (1線幹など) の3つに分類した。開放型は、「私の内界と外界との間の心理的な境界」が脆弱であることを意味している。ちなみに、①の開放型はさらに、完全開放型・先端漏洩型・閉鎖不全型・冠漏洩型 (樹冠の輪郭に隙間が2か所以上あるために幹の内空間が外界に漏洩してしまう型) に分かれ、②の閉鎖型は、基本型・冠型・放散型・その他の閉鎖型に分かれる。(上述の山中の漏斗状幹上開は、①のなかの完全開放型か閉鎖不全型に分類される。) 岸本はこのような分類を心療内科患者群 (慢性疼痛・うつ状態・癌など) と医学生群とで比較した結果、次のよ

うな結果を見いだしている。①患者群に開放型が多いのは、閉鎖系システムが脆弱になっている。②60歳以上の患者群で開放型のなかの完全開放型と先端漏洩型が多いのは、「心的エネルギーの低下あるいは葛藤処理能力の低下」が示唆される。③バウムテストで「開いていた」木は、「風景構成法」のなかのバウムでは「閉じる」傾向にある。これの理由は、木だけを描くバウムテストでは被検者の緊張が高まる。特に患者群においてはこのような「心理学的緊張状況で、あるいは心理学的な距離の接近によって心理学的な境界が脆弱となり、閉鎖系としてのシステムが揺らぐからではないか」と推測されている。

4．種々の疾患・精神病理とバウム

統合失調症では、斎藤ら（1969）は（神経症群や正常群と比較して）立体感が乏しくて非現実的・観念的・常同的な描写で空白の幹が多いなどの特徴を見いだしている。また、名島（2004）によれば、バウムの実や葉が星の形（☆）をした「星型バウム」が統合失調症に稀に見られるという。なお、先述の「漏斗状幹上開」（山中，1976）はもともと統合失調症や非定型精神病に特有のものとされていたが、その後、癌患者や心身症者、バセドウ病などにも生じることがあることが分かった（岸本，2002；山中，2003）。

知的障害児は精神発達が遅れて人格構造が未分化であるため、1線枝・1線幹が多い（国吉ら，1962）。一谷ら（1984）は成人の知的障害者を軽度群（IQの平均59.0）と中度群（IQの平均43.0）に分けて比較検討したが、それによると、年代を問わず一貫して中度群に多く見られたのは、地平線なし・細い幹・1線枝・地平までの1線枝・つぎ木した幹であった。1線幹については中度群が多いものの傾向差しかなかった。ただし、障害の度合いと年代との間に交互作用が見られた。

原ら（2000）は同じ知的障害でも青年期を対象にして自閉症の症状を持つ群と持たない群とを比較し、その結果、自閉症群は非自閉症群に比べて、①枝のみの幼型が多い、②紙面の下部と左側の領域を多く利用する、③左右対称のバウムを描くといった特徴が見られた。

中鹿（2004）は広汎性発達障害（PDD）のある知的障害者（PDD群）とPDDのない知的障害者（対照群）とを比較した。その結果、①PDD群は幹下直や全先直が多く、対照群は幹上開や全1線枝が多い、②全体的なイメージで木の形をとらえる対照群に比べると、PDD群は個々の形を組み合わせて木の形を作るという特徴があることが分かった。なお、PDD群の②の特徴は、「部分的な認知は良好であるが全体的な状況を統合してとらえることがむずかしい」という中枢性統合障害（Frith, 1989）の現れであるとしている。

非行関係・登校拒否関係では、非行群はバウムを真中に大きく描き、右方向にはみ出して描くものが多いが、登校拒否群では真中に小さく宙に浮いたような形の絵で、しかもどちらかと言えば左上方向に描くものが多い（一谷・西川，1983）。性非行群（中学生）のバウムは空白の幹・実や葉なし・地面なし・枝なしかわずかの枝といったもので、全体的に白っぽくて空虚な印象を受けるものが多い（一谷ら，1983）。バウムの切り株について言えば、非行少年群には「鋸で挽き落とされたような切り株」が見られ、激しいいじめに遭った中学生には「裂け折られたような切り株」が見られるという（林，1994）。ちなみに、桑代ら（2002）はかつて不登校を経験したことのある不登校経験群のバウムと対照群のバウムとを比較検討した。その結果、不登校経験者は神経症サイン項目の出現が多く、樹冠の形態に未成熟の傾向があり、特にアルバイトの者のバウムテストには副サインの出

現や樹冠の形態に未成熟なものが多く見られたという。

抑うつ状態では、斎藤ら（1971）によれば①幹のふくらみ・くびれ、②枝のふくらみ・くびれ、③管状根、④高い樹木でないこと、⑤T幹でないことの5項目は抑うつ状態にみられる特有のサインであり、抑うつを症状として持つ他のさまざまな疾患には同じサインがみられる。また、Castilla（1994）は抑うつ傾向を示すバウム特徴として、①垂れ下がった樹冠（抑うつを意味する）、②下降する枝ないし茂み（悲観主義）、③幹や根元の濃い陰影（不安のサイン）、④葉のない枝（対人接触の困難さ）などを挙げている。

健常老年者群に比べてアルツハイマー痴呆群では、樹高5㎝以下の極小のバウム・形態のくずれ・幹上直ならびに鋭・全空間倒置・力動感や生気感の減少といった特徴がある（小林，1990）。これらは、知的機能の衰退・自己像の萎縮・抑うつなどの反映だと考えられる。

西本（2004）は慢性腎疾患患児のバウムについて、IgA腎症の子どもではバウムの形態の変化が少ないがネフローゼ症候群では形態が著しく変化すると述べている。

5．検査者ー被検者関係の影響性

一谷ら（1985）は、テストは検者と被検者との人間関係の上に成立しているものであり、両者の関係の深化が被検者の描画への自我関与に強い影響を与えるため、もしも関係が不十分なままであれば防衛的・回避的・警戒的な描出となり、そのため検査者は誤った解釈をしてしまう危険があると述べているが、これは検査者にとっては大変重要な留意点である。なお、箱庭作りを用いて人間関係がバウムテストへ及ぼす影響性を検討した藤中（1996）の研究では、人間関係の影響力は高不安者の方に顕著に現れるし、紙面の左上領域の使用量の増加に現れるとのことである。

6．援助効果とバウム

心理療法や治療的教育によってクライエントのパーソナリティが変化すれば、その変化はバウムに反映されてこよう。例えば、うつ状態（神経症）の男性（石井ら，1975）、森田神経質の患者たち（津田ら，1979）、緊張病性昏迷の女性（大橋ら，1981）、情緒障害児短期治療施設への入所女児（精神病）（津田ら，1981）、全生活史健忘の少女（堀川ら，1985）、臨死の男性患者（木村，1987）、登園・登校拒否の生徒たち（津田，1994）、統合失調症の少女（郭，1998）、強迫症状や自殺企図のある女性（大槻，2000）、構成的エンカウンター・グループに参加した健常大学生たち（鈴木ら，2002）、不登校の女子中学生（堀江，2003）、思春期心身症の生徒たち（永田，2005）など、心理療法や治療的教育の進展とともに大変興味深い変化がバウムに現れている。施設入所児童の場合（阿部，2000）には、治療者との関係性のなかで児童が過去の心の傷を修復することによって外傷体験のサインも消えていく。先の、漏斗状幹上開やメビウスの帯現象にしても、「治療の進展により、妄想幻覚状態を乗り越え、患者がrealityを獲得するに従って、消失し、上端は閉じていく」（山中，1976）のである。ちなみに大槻や阿部は描かれたバウムをもとにして、クライエントのセルフイメージのあり様やセルフイメージの変化についてクライエントと対話しているが、バウムのこのような援助的活用は今後ますます重要なものとなるように思われる。

7．バウムテストのバウムとHTPのバウム

バウムテストでは一般にKochの教示に従って「実のなる木」の絵を描かせるが、BuckのHTP（3枚法）では単なる「木」を描かせる。これについて高橋（1994）は、「実のなる木と限定しないで描かれた木に、クライエントが自発的に果実を描いた時にこそ、果実が象徴する（中略）意味を適切に理解できる」と述べている。なお、阪田ら（1999, 2000）はバウムテストのバウムと統合型HTP（1枚法）のバウムを比較しているが、①同一の被検者がバウムテストと統合型HTPにおいてそれぞれ異なる木を描く場合がけっこう多いこと、②二つのバウムがまったく異なる被検者の群はまったく同じ群と比べて、統合型HTPにおいて遠近があり、また統合型HTPの3画像間のサイズが合理的であったことを見いだしている。

Ⅲ　自画像

粟津（2001）や田中（2003）の紹介にもあるように、画家で自画像をかく人は少なくない。豊田（2000）は、頻回の自殺未遂を含む苦悩に満ちた人生を送ったメキシコの女性画家のFrida Kahlo（1907-1954）が描いた一連の自画像、それも心象風景のなかに描かれた自画像の意味を、彼女の生活史上の出来事と絡み合わせながら大変興味深く考察している。「光と影、太陽と月に表されるような対立の構図は彼女の中のいわゆる境界性人格障害といえそうな心性を語っているにしても、彼女はそこから脱するべく苦闘し、最終的に自分の中に自分を守るものを見出そうとした」と豊田は述べている。

ところで、本節で言う「自画像」とは文字通り、被検者に自分自身の姿を描いてもらうという投映法である。以下、簡単に概観したい。

1．自画像における教示と方法

自画像が用いられたいくつかの論文において興味深い点がある。それは、それぞれの論文に用いられている教示や方法が異なっているという点である。例えば名島（2004）は、「黒ー色彩バウムテスト」を描いてもらった後に12色の色鉛筆とA4用紙を用いて、＜ここにある色鉛筆を使って、今度はあなたの全身像を描いてください。色は何色使っても、どんな色でもかまいません。紙を縦にして使ってください＞という教示のもとに自画像を描いてもらっている。桜井（1984）はクレヨンを用いて、＜これからみなさんに、クレヨンで自分の絵をかいてもらいます。紙を縦にして、からだの全部をかいてください＞という教示で自画像の研究を行っている。ただし、この場合クレヨンを用いたのは、対象が幼稚園児であったため、普段絵を描くときにクレヨンしか使用していなかったから、という理由からである。ちなみに桜井ら（1986）は、小学生を対象とした自画像の研究においてはクレヨンを用いず、鉛筆のみで、＜これから、みなさんに鉛筆で自画像を描いてもらいます。紙を縦にして、必ず全身を描いてください。これは絵の上手下手を調べるものではありませんから、楽な気持ちで描いてください。しかし、いい加減に描かないで、できるだけ丁寧に描いてください。また、隣の人の真似をしないこと、マンガやスタイル画のように描かないことに注意してください＞という教示のもとに調査を行っている。

山田ら（2002, 2004）は、鉛筆のみで、＜あなたの自画像を描いてください。できるだけ全身を丁寧に描いてください＞という教示のもとに自画像を描いてもらっている。

Murayama（2000, 2001）は鉛筆、黒のサインペン、クレヨンのすべてを用いて自画像を描いてもらっている。

このように、同じ自画像でもさまざまなやり方が見られる。色鉛筆やクレヨンで描かれた色彩のある自画像と、鉛筆のみで描かれた黒１色の自画像とではどのような違いがあるのだろうか。興味深い課題である。

阿部（1995）は脳外傷を負った20代の女性の障害受容の過程を自己イメージの変化から検討しているが、この場合に自己イメージを描いてもらう教示は＜自分の全身のイメージを思い浮かべてください＞であり、山田ら（2002, 2004）と同様鉛筆のみを用いたものであった。この教示のもとに描かれた彼女の自己イメージの描画は目や鼻などの顔の細部が欠如しており、表情が分かりにくい。また衣服なども省かれている。この結果が、脳外傷者に描画を行ったためなのか、それとも自己イメージを描くという教示のもとに行ったためなのかはよく分からない。しかし、筆者としては、イメージという言葉を用いた教示がその結果に影響しているように思える。全身像・自画像といった教示と自己イメージという教示の違いで描画にどのような相違があらわれるのだろうか。これもまた今後の課題である。

２．自画像を用いた研究

自画像を用いた研究はあまり多くはないが、自画像は幅広い領域に用いられている。山田ら（2002）は大学生を対象にして、自画像と適応性との関連を調査している。その結果、自画像によって攻撃性が高かったり、抑うつ状態であると判断された人ほど大学において成績不良であることが多いことが確認でき、自画像が適応性の査定に有用であることが分かった。また、山田ら（2004）は大学生の自画像とストレスとの関連性も調査しており、その結果ストレスレベルの高さと病理的な自画像の出現に関連があることが確認できた。このことからも、自画像に投影されたストレスから適応性を評価することの妥当性が示されている。

Murayama（2000）は女子美術大学生を対象にして、現在・10歳・30歳・50歳・70歳という５つの人生段階において、描き手が本来の自分自身であるとイメージしている「主観的自己像」と、他者にどのように見られているかをイメージした「客観的自己像」とを各段階ごとに１枚ずつの紙に描いてもらい、またそれらの自己像を被検者に自ら評価してもらうことで、自己評価の度合いを調査している。その結果、若い女性は年をとった自分をよりよく評価し、未来をポジティブにイメージしていることが分かった。また、彼女らは、客観的自己よりも主観的自己のほうを高く評価していることも分かった。さらにMurayama（2001）は、女子美術大学生を対象にして上述と同じ５つの人生段階において、彼女らが生活のなかで好んで行っている行動と、しなければならないから行っていると考えている行動とを動的自己イメージ（Kinetic Self-Image: KSI）とし、これら２つの動的な自己イメージを各段階ごとに１枚ずつの紙に描いてもらっている。また、それらを被検者に自己評価させている。その結果、若い女性は現在の自分の状態には満足していないようであるが、未来の自分に対しては高い評価を行い、現在よりも良い生活が未来に存在することを期待していることが分かったという。

入江（1986）は非行少年、それも1983年に起こった「横浜浮浪者襲撃事件」に参加した10人の少年たちの自画像を研究し、少年たちが描いた自画像には、彼らの存在様式や性格

特性が投映されることを確認している。

桜井（1984）は幼稚園児を対象に、枠付け法による自画像の調査から、人物画の大きさと運動に関する有能感との間に逆Vの字の関係を見いだしている。さらに桜井・杉原（1986）は、小学6年生を対象にした枠付け法の自画像を行い、その結果、自画像の頭の面積と自己価値との間に逆Vの字の関係を見いだしている。

その他、統合失調症（精神分裂病）の患者の自画像を吟味した牛島・佐藤（1973）や山内（1973）、高江洲（1975）、井上・水田（1998）などの研究がある。さらには、「九分割統合絵画法」を用いて「私」というテーマのもとに現れた種々の自己イメージを探求したものや（森谷，1989, 1990）、抜毛症の子どもの自由画のなかに現れた自分像を検討したもの（渡辺，2000）、ある男性の不安障害者に対する集中内観療法の効果を自画像や色彩バウムなどを用いて検討したもの（佐藤ら，1998）などがある。

このように、自画像という描画法はさまざまな領域で検討されている。この場合、自画像を描いてもらってそこに表現される自己イメージと、人物画や自由画のなかに現れた本人像に表現される自己イメージには、いったいどのような違いがあるのだろうか。今後の課題である。

Ⅳ　学校場面の関係

子どもたちが学校のなかで自分や教師、友人をどのように受け止めているかという情報を得る試みとして、学校場面の描画がある。例えば、石川ら（1983）によれば、Kutnick（1978）は「非動的学校画（Nonkinetic School Drawing）」を考案したが、これは、「級友がいる教室」を小学生に描かせ、描いたものを説明させ、絵のなかの人物・教室・教師・備品などについて分析し、絵画と説明の差などから、各世代での教師の権威を調べるというものである。

Prout & Phillips（1974）は、「動的家族画（Kinetic Family Drawing）」の知見を補足するために、「学校」をテーマに描かせる「動的学校画（Kinetic School Drawing：KSD）」を考案した。これは、学級内における児童・生徒の心理的な側面を知るための描画法である。その後、Knoff & Prout（1985）によって「家族・学校動的描画システム法」が提唱された。これは、家族画と学校画を組み合わせた方法を子どものパーソナリティーの査定や心理療法に使うという新しい方向性を示している。

一般的には、動的家族画（Kinetic Family Drawing：KFD）を最初に行った後でKSDを実施する。多くの場合、重要な家族ダイナミックスが家族と学校の両方の状況のなかで子どもに影響を及ぼしているので、KFDで得られた情報をもとにKSDを実施するほうがより正確に学校場面での子どもの問題点をとらえることができる（Knoff & Prout, 1985）。しかし、一定時間のなかで2つの描画を行うことは、子どもにとって大変な時間と労力がかかるという欠点があることも指摘されている（加藤・神戸，2000）。この点に関しては、日本においてはKSDを単独に用いた研究がいくつかある。

以下、KnoffとProutの提唱したKSDについて概観し、あわせて日本の研究についてもふれてみたい。

1．KSDの実施方法

適切な高さのテーブルを使って、椅子に腰掛けて描かせる。Bの鉛筆（消しゴムつき）とA4判の白い画用紙を与え、＜学校の絵を描いてください。その時に自分と自分の先生と友だちを1人ないし2人、その絵に入れて描いてください。何かやっているところでしかも人物全体を描いてください。あなたが描けるだけの絵を精一杯思い出しながらそれを描いてください＞と教示する。子どもが絵を描いている間、検査者は離れたところに位置し、観察する。そして、描かれた順番に従って、抹消の数と箇所、描き方、動きの機敏さ、その他さまざまな行動として見られたことを詳細に書き留めておく。

描画が完成したあと、検査者は子どもから鉛筆を受け取ってから質問段階を始める。この質問段階では、まずそれぞれの人物像や動物像の名前や年齢を確認し、次に絵のなかでは何が起きていて、それぞれが何をしているかを述べてもらう。

2．KSDのスコアリング

KSDは施行後、多くの質的スコアリング・カテゴリーに基づいて評価される。Knoff & Prout（1985）によれば、スコアリング冊子（WPSカタログNo.W-208B）を使用すると、子どもの答えを記録しそれと照合しながら分類するのに便利だということである。その冊子は、解釈のための5つの診断領域とその構成要素が一覧表になっているので、子供の反応を整理し、系統的に解釈仮説を立て、それを検証するための手引きとなっている。

3．KSDの解釈

解釈の方法については、5つの診断領域に分けて解釈する方法が提唱されている。それは、①人物像と人物像間のアクション、②人物像の特徴、③位置・距離・バリア、④スタイル、⑤シンボルという構成である。ここでの解釈は基本的には、Sarbaugh（1982）と、Prout & Celmer（1984）に依拠しているとのことである。なお、Knoff & Prout（1985）によると、学校という場面が予め設定されているため、KSDの解釈にあたっては、心理学的・教育学的発達と、実際の教室や学校環境の特徴といった、2つの内容が考慮されなければならない。

ともあれ、KSDの各細部の解釈はこれからの大きな課題である。例えばKSDに見られる「大きな先生像」についての解釈には、「学校場面あるいは学校活動での不全感」（Sarbaugh, 1982）と「自信のある学業成績と関連していること」（Prout & Celmer, 1984）という、互いに相反する2つのものがある。いったいどちらが妥当なのかを十分に吟味することが大切となろう。

4．KSDの妥当性

Walton（1983）はスペイン・ポルトガル・イングランドの子どもたちを対象にして、7つのKSD特性の評価に関する比較研究をしている。つまり、描く位置、描画の大きさの偏り、画線の質、描画スタイル、葛藤場面の有無などについて比較した結果有意差がなかったことから、KSDは文化的なバイアスのない技法であることが分かったと述べている。

Prout & Celmer（1984）は公立小学校5年生100人の学力を予測する手段としてKSDの利用を検討した結果、KSD変数と学力との間に有意な重相関が認められたことを報告

している。具体的に言えば、KSDの10変数のうち6変数が学力と有意に相関していた。そのうち学力は、友だちの数・Reynoldsスコア・望ましくない行動をとっている自己像と負の相関があり、子ども像の高さ（身長）・教師像の高さ・勉強している自己像と正の相関があった。この結果からProut & Celmerは、KSDが臨床的な価値と効用を有するものであり、学校に対する見方や感じ方と子どもの学力との関係を調べる手助けとなると結論づけている。

Schneider（1978）は、KSDの妥当性を評価するためにスクール・サイコロジストへ紹介されてきた小学生全員に対してKFDとKSDを行った。学校における子どもの問題の深刻さと家族の問題の深刻さの関係を検定したところ、どちらも年齢とIQのみによる予測には有意なものではなかった。このことから、妥当性をあまり支持するものではないと結論づけた。

5．日本におけるKSDの研究と発展

KSDについての研究は日本ではまだ少ないが、橋本（1998）は、KFDやKSDを通して不登校の生徒を理解し、学校の教育相談や適応指導教室で援助を行った事例を報告している。また、鈴木・山田ら（2003）は、臨床的な評定の経験のない教師でも評定可能なKSD評定用紙を作成し、学級において児童・生徒が認知している教師の印象を描画で把握することを目的とした研究を行っている。評定用紙は4ページで、全体的印象と5つの診断領域からの、合計70項目で構成されているものを作成した。また、その妥当性を確認するために、日本と韓国の児童・生徒のKSDを比較した。その結果、教師像の大きさについては、日本の小学5年生と中学2年生では小学5年生の方が「自己像に比較して大きな教師像」を描く傾向があり、教師や自分以外のその他の人物の数においては、韓国の小学5年生より中学2年生のほうが「その他の人物像が3人以上」を描いたのが多かったことが分かった。これらの結果は、KSDの解釈の基準を洗い直すために意義あるものであった。

その他、加藤ら（1989）は、学校に関して何らかの問題をもつ子どもたち、例えば不登校・校内暴力・いじめ・非行などを示す子どもたちの学校状況や学校体験の知覚がどのようにKSDに反映されてくるかを、症例を通して検討している。その結果、問題を持つ子どもは学習場面ではなく、課外活動や休憩時の活動を描くことが多く、教師不在の描画が多く見られるということが分かった。また、自分と友だち・教師との間に柱やドアを描き、区分化や包囲といったものが描画に表れ、かかわりの希薄さを象徴しているものが多いという結果になった。

KSDを応用した試みとして、石川（1983）は臨床場面において「合同動的学校描画(Conjoint Kinetic School Drawing：CKSD)」を行っている。これは、不登校の生徒を対象としたものであるが、＜学校で、あなたと友だちが何かしているところを家族で話し合いながら描いてください＞と教示し、家族で共同制作させるというものである。CKSDは、親子の間でタブーであった学校の話題を「学校の場面を描く」という間接的かつ非刺激的な形で脱感作しつつ、クライエントやその家族に現実に直面化させることをねらいとする。石川は、CKSDは家族の調整と学校の調整の接点を見いだすのに有効であったと述べている。

ところで、KSDを実施する場合、時間がかかることや、描画スキルが必要になること

がKSDの欠点である。そこで船木（2005）は、岡田（2001）の「家族イメージ彩色法」のやり方を学校場面に応用して、「学校イメージ彩色法」というものを試みた。これは、①まず、学校にいる担任の先生と自分と友だちを表す色（12色）を選択させ、②「色を選んだら、その人たちを例えば丸や三角や四角などどんな形でもいいですから、その人を表す形を決めて用紙に描いてください」と教示するものである。小学生3年生と5年生の計70名を対象に「学校イメージ彩色法」とスクールモラールテストを実施した結果、①自分や教師・友だちのイメージに合った色と形、②形の大きさや位置関係（自分と教師、自分と友だち）から、小学校への生徒の適応状態を知ることができた。「学校イメージ彩色法」はまた、きわめて短時間で施行できるという長所がある。

以上、もっぱらKSDを中心として学校場面の描画について述べてきたが、この研究はまだ発展途上にある。しかし、学校画に子どもと教師、友だちとの相互作用が表現されるのは否定できない事実であり、今後さらに広く心理臨床家や教師が有効に活用できるように検討を加えていく必要がある。

V　食事場面の関係

自由画・家族画・動的家族画・動的学校画などを施行した場合、被検者がたまたま食事場面を描くことはある。しかし、最初から食事場面に焦点を当てた研究はまだまだ少ない。川邉（1994）は、<□□のころの食事の風景を思い出して描いてください><現在の食事の風景をかいてください>といった教示で絵をかかせ、合わせて食事形態に関するアンケートも行った。その結果、①非行少年と一般少年の同年齢時の食事場面の絵には、家庭的問題の反映と考えられるような相違がある、②描画に示される小学1年生から現在に至る食事形態の変化に保護領域からの離脱過程が反映される、③食事のおいしさや雰囲気には当時の感情が鋭敏に反映される、④これらの描画は実際の風景として描かれる傾向にある、⑤食事風景に焦点を当てた描画では通常の家族画よりも解釈の幅が狭まるが、その代わりに分析の精度は向上し、標準化も容易になる、⑥継時比較することは、家族力動の分析、非行化過程の分析に有効であるなどと述べている。

一方、室田（1996）は、動的家族画の<家族のそれぞれが何かをしている様子を描く>という指示を、<あなたの家族が食事をしているところを絵に描いてください>という指示に変えて計597人の子どもに絵をかいてもらった。そして、描かれた絵を、表現内容で2群8項目に、表現様式で2群3分類に分けた。室田は、<あなたの家族が食事をしているところを絵に描いてください>という指示によって、家族内人間関係の布置をより細かくとらえることができると述べている。室田（2002）はさらに、小学校5・6年生の1552人を対象に、<あなたの家族のいつもの食事の様子を絵に描いてください>という指示で調査を行い、その結果を、KFDの分類方法に準拠しながら、表現内容として8つの型、表現様式として4つの型に分類した。そして、1995年の調査結果と今回の2002年の結果とを比較検討したところ、子どもたちが絵のなかに投影した家族のかかわりの状況は多くの問題を示唆していると述べている。具体的には、①「意欲希薄型」が減少し、食卓状況から良くも悪くも「かかわる関係」そのものが減少している。②「コミュニケーション充実型」が減少し、親からの支配や干渉などの圧力に抵抗する態度が減少している。③「強制

感型」「関係貧困型」「辺縁位置型」「人物包囲型」が増加し、「かかわらない関係」が増えている。④表現様式では、「萎縮型」「評価を気にする型」「無自覚型」などが増加し、子どもたちおよび家族の状況、特に家族メンバーによる「かかわる状況」が大きく変化しつつある。

田村（2004）は、家庭科の時間にかかれた家庭の食事風景の絵を用いて、小学校における虐待児童の早期発見と対応についての報告を行っている。田村は、家庭訪問をして保護者に話をしても金品の盗みがとまらなかった児童がかいた絵を分析した結果、その子どもが母親から虐待を受けているということに気づいた。そして、そのことをきっかけにして子どもに語りかけたり、関係機関と連携をとったりするうちに子どもの様子が落ち着いたという。田村は、情緒不安定な子どもや自己表現が未熟な子どもは、感情を言葉にできなくても絵のなかにストレートに表現することがあると述べている。

津田（2004）は、生き方が分からないという悩みを抱えた女性を対象にして、「食事風景画」を媒介とした面接を行っている。具体的には、12色の色鉛筆とA4の用紙を用いて＜あなたが最近食べた印象的な食事の風景を絵に描いてください。絵の上手、下手は関係ないので自由に描いてください＞という教示を行い、①印象的な食事風景画を描いてもらう「描画段階」、②描画について説明してもらう「描画説明段階」、③描画後に自己吟味をしてもらう「自己吟味段階」という３つの段階を経る手続きをとった。その結果、食事風景画を媒介として自らの人生について語るという心理面接は、家族関係から生じた葛藤を解きほぐすという効果が見られた。

津田（2005）はまた、「食事風景画」を10代から80代までの男女26名に行った。その結果、①現在よりも過去の食事場面が選択されやすいこと、②食事の場所は家が多いこと、③登場人物は家族が多いこと、④食事場面での感情としては特にないという人が多いことなどが分かった。その他、10代から80代までの男女55名に質問紙形式の食事風景画を行った結果、食事風景画の自己吟味段階を行うさいの計15の視点（留意点）を抽出した。

総じて言えば、本節で述べた食事場面を描画してもらうというやり方は学校現場において容易に行うことができ、しかも被虐待児などの早期発見の道具として、今後用いられていく可能性が高いと考えられる。ただし、描画の解釈には専門性と長年の経験が必要である。不正確な読みは児童や保護者に対する誤った理解をもたらすことになろう。なお、家族との食事場面についてはこれまで小学生や非行少年（思春期）を対象にした研究はあるが、それ以外の年代の研究データがない。今後の研究課題であろう。

Ⅵ　おわりに

本稿では描画法のなかでもバウムテスト・自画像・学校場面・食事場面の関係などについて、それぞれの問題点や検討課題を挙げつつ概観した。描画法のなかのなぐりがき・枠づけ法その他については次の機会に譲りたい。

引用文献

阿部順子　1995　ある脳外傷者の障害受容過程—自己イメージの変化を通して　心理臨床学研究，13：3，266-275.

阿部惠一郎　2000　バウム・テスト　福西勇夫・菊池道子編，現代のエスプリ390　心の病の治療と描画法，144-155.

粟津則雄　2001　自画像の魅力と謎—自己をみつめた11人の画家たち　日本放送出版協会

Buechele-Karrer, B. 1974 *Vergleichende Untersuchungen zwischen Dreibaum und anderen Projectiven Tests.* Praxis der Kinderpsychologie und Kinderpsychiatrie, 23, 166-181.

Castilla, D. de 1994 *Le test de l'arbre-Relation humaines et problemes actuels.* Masson: Paris. 阿部惠一郎訳，2002，バウムテスト活用マニュアル—精神症状と問題行動の評価，金剛出版.

Frith, U. 1989 *Autism: Explaining the enigma.* Oxford: Blackwell.　冨田真紀・清水康夫訳，1991，自閉症の謎を解き明かす，東京書籍.

藤岡喜愛・吉川公雄　1971　人類学的に見た，バウムによるイメージの表現　季刊人類学，2-3，3-28.

藤中隆久　1996　バウムテストにおける人間関係の効果の実証的研究　心理臨床学研究，14:2，163-172.

深田尚彦　1957　幼児の樹木描画の発達的研究　心理学研究，28:5，34-36.

深田尚彦　1959　学童の樹木描画の発達的研究　心理学研究，30:2，29-33.

船木智美　2005　学校イメージ彩色法　山口大学大学院教育学研究科臨床心理査定演習レポート

後藤佳珠　1975　臨床場面に適用した“Baum Test”(1)　新しい技法“Baum-C”“Baum-S”を加えて　芸術療法，6，53-62.

原　幸一・中西恵美　2000　知的障害をもつ自閉症者のバウムテスト　心理臨床学研究，18:4，390-395.

橋本秀美　1998　動的家族画，動的学校画を通した，不登校生徒の理解と治療過程について—事例を通しての有効性の検討　応用教育心理学研究，14，19-23.

林　勝造　1994　「バウムテスト」論考　日本描画テスト・描画療法学会編，臨床描画研究Ⅸ，金剛出版，3-18.

堀江姿帆　2003　バウムテストから見た不登校女子の事例　臨床心理学，3:5，705-711.

堀川公平・上妻剛三　1985　全生活史健忘を呈した11歳の少女の治療　精神医学，27:7，801-808.

一谷　彊・西川　満　1983　バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否　京都教育大学紀要，Ser. A，63，1-23.

一谷　彊・山下真理子・津田浩一・林　勝造・国吉政一　1983　不純異性交遊児童の人格像—バウムテストによる検討　京都教育大学紀要，Ser. A，62，17-39.

一谷　彊・西川　満・村澤孝子　1984　バウムテストにみられる精神遅滞者の反応特徴　京都教育大学紀要，Ser. A，65，1-27.

一谷　彊・林　勝造・国吉政一（編著）　1985　バウムテストの基礎的研究　風間書房

一谷　彊・津田浩一・山下真理子・村澤孝子　1985　バウムテストの基礎的研究—いわゆ

る「2枚実施法」の検討　京都教育大学紀要, Ser. A, 67, 17-30.
一谷　彊・林　勝造・国吉政一・小林敏子・津田浩一・山下真理子　1986　バウムテストによる生涯発達研究〔Ⅰ〕—樹冠と幹の関係指標の発達的傾向と精神的加齢現象の検討　京都教育大学紀要, 69, 53-68.
一谷　彊・小林敏子・津田浩一・山下真理子・弘田洋二・林　勝造・国吉政一　1987　バウムテストによる生涯的発達研究〔Ⅱ〕—壮年期から老年期にいたるバウムテストの空間利用と加齢の関係　京都教育大学紀要, 71, 31-49.
一谷　彊・相田貞夫・小林敏子・津田浩一・山下真理子・弘田洋二・林　勝造・国吉政一・松井孝史　1988　バウムテストによる生涯的発達研究〔Ⅲ〕—空間領域の使用量と加齢の関係　京都教育大学紀要, 72, 1-29.
一谷　彊・津田浩一・小林敏子・山下真理子・弘田洋二・松井孝史・林　勝造・国吉政一　1989　バウムテストによる生涯的発達研究〔Ⅳ〕—幹中心部の位置と加齢の関係　京都教育大学紀要, 75, 1-13.
井上洋一・水田一郎　1998　一単純型分裂病症例の描画にみる分裂病性自閉の精神病理学的研究　精神神経学雑誌, 100:6, 398-411.
入江是清　1986　非行少年の自画像と家族画—横浜浮浪者襲撃事件の少年たち　家族画研究会編, 臨床描画研究Ⅰ, 金剛出版, 150-168.
石井知行・細田ゆかり　1975　うつ状態における病像の変遷と樹木画テストの関連について　広島医学, 28:1, 45-48.
石川　元・外山知徳・三原龍介・杉浦一枝・大原健士郎　1983　登校拒否と家族—非言語的側面からのアプローチ　臨床精神医学, 12: 7, 825-835.
郭　麗月　1998　一分裂病少女の治療経過　精神科治療学, 13:10, 1265-1270.
加藤孝正·神戸 誠　2000　学校画・家族画の日本における適用　加藤孝正·神戸　誠訳, 学校画・家族画ハンドブック, 金剛出版, 151-183.
加藤孝正・小栗正幸・神戸　誠・水谷友則・仲村正巳・小栗和子　1989　問題行動をもつ子供の動的学校画の試み　家族画研究会編, 臨床描画研究Ⅳ, 金剛出版, 129-145.
川邉　譲・末永　清・高田明子・渡邉彰一　1994　非行少年の食事形態に見る家族病理に関する研究(1)　犯罪心理学研究, 32, 118-119
木村　智　1987　一人の臨死患者のバウム表現に現れた治療過程　芸術療法, 18, 45-57.
岸本寛史　2002　バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群　心理臨床学研究, 20-1, 1-11.
Knoff, H. M. & Prout, H.T. 1985 *Kinetic Drawing System for Family and School: A handbook*. Los Angeles: Western Psychological Services. 加藤孝正·神戸 誠訳, 2000, 学校画・家族画ハンドブック, 金剛出版.
小林敏子　1990　バウムテストにみる加齢の研究—生理的加齢とアルツハイマー型痴呆にみられる樹木画の変化の検討　精神神経学雑誌, 92:1, 22-58.
Koch, K. 1949 *Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel.* Bern: Hans Huber.
Koch, C. 1952 *The Tree Test: The tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis.* Bern: Hans Huber. 林　勝造・国吉政一・一谷　彊訳, 1970, バウム・テスト—樹木画による人格診断法, 日本文化科学社
国吉政一・小池清廉・池田舜甫・篠原大典　1962　バウムテスト（Koch）の研究（1）

発達段階における児童（正常児と精薄児）の樹木画の変遷　児童精神医学とその近接領域, 3:4, 47-56.
Kutnick, P. 1978 Children's drawings of their classrooms: Development and social maturity. *Child Study Journal*, 8, 175-185.
桑代智子・郷間英世・森下　一　2002　不登校を経験した成人の対人関係について—バウムテストによる検討　教育心理学研究, 50:3, 85-94.
宮崎忠男・小林　淳・藤井純子・望月秋一・上島　求　1989　バウムテストの海外文献紹介—Vergleichende Untersuchungen zwischen Dreibaum und anderen Projectiven Tests.　心理臨床, 2:3, 231-237.
森谷寛之　1983　枠づけ効果に関する実験的研究　教育心理学研究, 31:1, 53-58.
森谷寛之　1984　バウム・テストにおける枠づけ効果—症例研究　心理臨床学研究, 1:2, 73-81.
森谷寛之　1989　イメージ調査法としての九分割統合絵画法—大学生の「自己イメージ」について　家族画研究会編, 臨床描画研究Ⅱ, 金剛出版, 154-167.
森谷寛之　1990　九分割統合絵画法と青年期の自画像の発達過程　大東祥孝・松本雅彦・新宮一成・山中康裕編, 青年期　美と苦悩, 金剛出版, 229-242.
村田陽子　2002　セルフ・エスティームと黒一色彩バウムテストとの関連性　山口大学心理臨床研究, 2, 89-97.
Murayama, K. 2000 Image of life stages as expressd in Self-Portraits. *Japanese Bulletin of Arts Therapy*, 31:2, 60-65.
Murayama, K. 2001 Female art students' images drawn in Kinetic Self-Image drawings. *Japanese Bulletin of Arts Therapy*, 32:2, 34-41.
室田洋子　1996　食卓にあらわれた子どもの心　生協総合研究所編, みんなでつくる楽しい食生活, 合同出版, 40-60.
室田洋子　2002　KFDによる家族関係の分析－02　青葉学園短期大学紀要, 27, 113-134.
永田昌博　2005　バウムテストに見る思春期心身症生徒の回復過程　心理臨床学研究, 21:1, 34-44.
名島潤慈　1996　黒一色彩バウム二枚法の意義　熊本大学教育学部紀要, 45, 人文科学, 271-281.
名島潤慈　1998　色彩バウムテストと抑うつ状態との関連性　熊本大学教育実践研究, 15, 1-5.
名島潤慈　1999　黒一色彩バウムテストの解釈　熊本大学教育実践研究, 16, 61-65.
名島潤慈　2004　心理アセスメントにおける黒一色彩バウムテスト・自画像・真珠採り・夢（1）　山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 17, 143-156.
名島潤慈・増田勝幸・増田徳幸・増田文枝　1974　色彩 Baumtest に関する研究(1)　ロールシャッハ・テストとの関連性　第25回中国四国精神神経学会発表資料
名島潤慈・増田勝幸　1993　バウム・テスト　上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック　初版, 西村書店, 223-238.
名島潤慈・原田則代・横田周三・森田裕司・増田勝幸・植村孝子　2001　バウムテスト　上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック　第２版, 西村書店, 186-197.
名島潤慈・杉本沙由理・金子恵理　2004　心理アセスメントにおける描画法概観（1）

山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 17, 167-182.
中鹿　彰　2004　バウムテストから見た広汎性発達障害の認知特徴　心理臨床学研究, 21:6, 611-620.
中園正身　1996　一変法としての樹木画法の研究―根を強調した教示法の導入について　心理臨床学研究, 14:2, 197-206.
西本智恵　2004　樹木画に見られる慢性腎疾患患児の身体像と自己像に関する一考察　日本描画テスト・描画療法学会編, 臨床描画研究19, 北大路書房, 120-133.
大橋峰子・牧原寛之　1981　特異な回復過程を示した緊張病性昏迷の１例　臨床精神病理, 2, 231-242.
大槻一行　2000　強迫症状の軽快に交互なぐり描き物語り統合法が奏功したと思われる一女性例―強迫症状を「忘れておく」ということ　日本芸術療法学会誌, 31:2, 53-59.
岡田珠江　2001　家族イメージ彩色法―色と単純なかたちとで表現する家族画　日本芸術療法学会誌, 32:2, 5-13.
Prout, H. T. & Phillips, P. D.　1984　School drawings and academic achievement: A validity study of the Kinetic School Drawing technique. *Psychology in the Schools*, 21, 176-180.
Prout, H. T. & Celmer, D. S.　1974　A clinical note: The Kinetic School Drawing. *Psychology in the Schools*, 11, 303-306.
斎藤通明・大和田健夫　1969　バウムテストの研究（第１報）―精神分裂病の場合　松仁会誌, 8, 83-92.
斎藤通明・大和田健夫　1971　バウムテストの研究（第２報）―うつ状態の場合　松仁会誌, 10, 29-37.
阪田真代・溝口純二・菊池道子　1999　統合型HTPに描かれた「木」とバウムテストに描かれた「木」の比較―大学生を対象とした予備的研究（その１）　日本心理臨床学会第18回大会発表論文集, 538-539.
阪田真代・溝口純二・菊池道子　2000　統合型HTPに描かれた「木」とバウムテストに描かれた「木」の比較―大学生を対象とした予備的研究（その２）　日本心理臨床学会第19回大会発表論文集, 272.
桜井茂男　1984　幼児における人物画の大きさと有能感および体格の関係―枠付け法を用いて　教育心理学研究, 32：3, 54-59.
桜井茂男・杉原一昭　1986　児童における人物画の大きさと有能感およびホープレスネスとの関係―枠付け法を用いて　筑波大学心理学研究, 8, 73-79.
Sarbaugh, M. E. A. 1982 Kinetic Drawing-School (KD-S) Technique. Illinois School Psychologists' Association Monograph Series, 1, 1-70.
佐藤正弘・三輪美和子・田代修司・冨永春夫・松嶋香澄・東　豊・川原隆造　1998　集中内観療法が奏効した不安障害の一例　心理臨床, 11:3, 195-201.
Schneider, G. B. 1978 A preliminary validation study of the Kinetic School Drawing. Dissertation Abstracts International, 38, 6628A. (University Microfilms No.7805520)
鈴木慶子・鍋田恭孝・塩崎尚美　2002　バウムテストからみた構成的エンカウンター・グループの効果―グループワーク前後のバウムテストの分析を通して　心理臨床学研究,

20:4, 384-393.
鈴木眞雄・山田一郎・松田　惺・Kim Min-Jeong　2003　動的学校画評定用紙の作成とその評価のための日本と韓国の比較　愛知教育大学研究報告, 52（教育科学編）, 81-89.
高江洲義英　1975　慢性分裂病者の人物画と「間合い」　芸術療法, 6, 15-21.
高橋雅春　1994　HTPPテストにおける樹木画　日本描画テスト・描画療法学会編, 臨床描画研究Ⅸ, 金剛出版, 60-72.
田村通子　2004　養護教諭の視点から－危機にある子どもへの希望の種まき　健康教室, 11月号, 東山書房, 14-22.
田中英道　2003　画家と自画像―描かれた西洋の精神　講談社学術文庫
豊田園子　2000　7枚の絵が語るこころの軌跡―フリーダ・カーロの作品から　京都文教大学臨床心理学科編著, ザ・臨床心理学科―大学で何をどう学ぶか, 創元社, 130-154.
津田浩一・宇佐晋一・西尾　博・長尾正男　1979　神経症とバウムテスト―森田療法の治療過程の検討　心理測定ジャーナル, 15:11, 3-10.
津田浩一・奥　紀子・山口俊郎　1981　心理治療過程とバウムテストとの関係―情短施設での収容治療例を通して　児童精神医学とその近接領域, 22:4, 282-297.
津田浩一　1992　日本のバウムテスト―幼児・児童期を中心に　日本文化科学社
津田浩一　1994　バウムテストと児童臨床―心理治療過程におけるバウムの変化　日本描画テスト・描画療法学会編, 臨床描画研究Ⅸ, 金剛出版, 41-59.
津田真裕美　2004　食事風景画を用いた心理面接の試み―生き方が分からないという悩みを抱えた事例の検討　中国四国心理学会論文集, 37, 61.
津田真裕美　2005　食事風景画の臨床心理学的意義　山口大学大学院教育学研究科修士論文抄, 3, 35-38.
牛島定信・佐藤美丸　1973　精神分裂病患者の自己像―予備的研究　精神医学, 1, 39-47.
臺　弘・斎藤　治・三宅由子　2001　日常診療のための簡易精神機能テスト（第3報）分裂病者のバウム・テスト　精神医学, 43:7, 737-744.
Walton, J. R.　1983　Kinetic School Drawings of referred　School children. Paper presented at the National Association of School Psychologists', Detroit.
渡辺　亘　2000　抜毛症の心理療法における「閉ざされた攻撃性」と「開かれた攻撃性」―ある男児との遊戯療法から　心理臨床学研究, 18:2, 139-150.
山田ゆかり・天野　寛　2002　自画像による大学生の適応性の検討　名古屋文理大学紀要, 2, 3-12.
山田ゆかり・天野　寛　2004　自画像にみるストレス　名古屋文理大学紀要, 4, 3-11.
山中康裕　1976　精神分裂病におけるバウムテストの研究　心理測定ジャーナル, 12:4, 18-23.
山中康裕　2003　こころと精神のはざまで　2　バウムテスト論考　臨床心理学, 3:2, 239-245.
山下真理子　1982　バウムテストの発達的研究―樹冠と幹の発達的傾向および空間関係の描写について　教育心理学研究, 30:4, 23-28.
山内洋三　1973　分裂病者のセルフポートレートについて　臨床精神医学, 2:2, 243-250.